

こうべ特支P連会報

41号

編集・発行／神戸市立特別支援学校PTA連合会
発行人／会長 野村 誠一

発行日：平成31年1月31日



神戸市立青陽東養護学校



神戸市立盲学校



神戸市立いぶき明生支援学校



神戸市立青陽須磨支援学校



神戸市立友生支援学校

共に生きる社会を願って



もくじ

- P. 2 校種別研修会 講演会
- P. 4 スクールマップ
- P. 6 災害時の障がい者対応について

- P. 8 学校紹介
- P.11 会報に寄せて
- P.12 こうべ特支P連コラム

モザイクアート

平成30年11月25日
PTAフェスティバル
特支ブースにて

校種別研修会 講演会

平成30年10月2日(火)、
神戸市立特別支援学校PTA 連合会主催による校種別研修会が開かれました。会場の神戸市総合教育センターは、講師に竹田契一先生をお招きして、子育ての悩みを共有し、障がいに対する理解を深めることを願う多くの方の熱い思いとあたたかい拍手に包まれました。

共に生きる社会を願って



「発達に課題を抱える

子どもの理解と教育的支援」

大阪医科大学LDセンター 顧問 竹田契一

発達障がいという言葉には2つの意味があります。発達障害者支援法ができる前は、知的障がいも肢体不自由も、大脳機能が関係している様々な症状は全部ひっくるめて発達障がいでした。ところが、発達障害者支援法を厚生労働省が作る過程で、広汎性発達障がい・学習障がい・注意欠如多動性障がいの3つを発達障がいと決めました。文部科学省はこの子どもたちのことをずっと軽度発達障がいと呼んできましたが、言葉の整合性の問題が出てきたので、厚生労働省に文部科学省も合わせました。よって、広い意味と狭い意味の発達障がいがあり、現在は狭い意味での発達障がいが一般的に使われています。

平成19年から始まった特別支援教育は12年目に入りました。全小学校での実態把握調査で、通常学級の中に発達に課題がある子は最低6・5%いるとわかりました。また特別支援学級の子が3・5%いるので合わせて10%。つまり、授業についていけない子が、小学校に1割いることとなります。これに特別支援学校の子を合わせると、11・6%の子が特別支援対象者です。これはすごい数字です。特殊教育時代は1・6%の子だけに焦点が当たり、あとは無視されていました。平成19年から、通常学級の中にいる子に初めて焦点が当たり、特別支援教育が広まってきました。

ここで一番伝えたいことは、『子どもに合った学びを探そう』ということです。授業の中で『国語は、算数はこう教える』といった、上から教科書で教えることに合わない子どもたちがいます。アメリカには多量

知能という考え方がありません。子どもたちには『言葉に優れている、数に優れている、絵を描くことに優れている、音楽・運動能力・対人関係・自分への理解力・自然への理解に優れている』というような自分が得意とする能力があります。今までの教育は、与えられたカリキュラムの中で得点をとることを学力と見てきましたが、得意とする能力を伸ばしていくことの方が実は大切ではないかという考えです。すべてができなければいけないという時代ではなくなっています。その子が得意としていることをさらに伸ばしていく方がやる気につながります。ダメなところを触れば触るほど、不登校につながっていくこともわかってきました。このことから『子どもにあった学びを探そう』ということが、発達障がいの子だけでなく、すべての子にとっても本当に一番大切なことになるのではないかと思います。これからは『君には君の学び方があるよね。自分の学び方を探そうね』という考え方でやっていくべきです。特別支援学校の基本的な考え方は、これに合っています。『自分に合った学び方を探そう』というのが、これからの教育の一つになっていきます。そう考えると、特別支援教育とは教育の原点です。

発達に課題のある子の中で、『言ったことはわかるけど、裏が読めない』『言わないとわからない』という子がいます。自閉系の子に多いです。こういった子どもたちは教えたことだけが入ります。『を言ったら十を悟る』ではありません。別の言葉では『父の背中を見て子は育つ』ですが、それでは育ちません。『全部、ていねいに、細かく、まずは言葉で。指導で

はなく、一緒に学んでいく』姿勢が必要です。例えば、小学校へ行くとき『廊下を走るな』というポスターがあります。走っている子に『Aくん、廊下を走ってはダメだよ』と、10人中9人は『あつ、しまった』となつてゆっくり歩きます。それは『廊下を走るな』という否定的な言葉の真の意味がわかっていないからです。ところが、それがわからない子どもが10人中1人います。そうすると『Aくん、廊下を走ってはダメだよ』と、『じゃあ、どうすんねん』となります。普通はそう考えないので、『廊下を走ってはダメだよ』で声掛けは終わりです。しかし、『廊下はゆっくり歩こうね』といった言葉にポスターを書き換えた方がいい子がいるのです。物事は肯定的に伝えましょう。否定的な言葉は使わないようにしましょう。アスペルガーという自閉の要素がある子どもの場合、絶対に否定語は使わないことです。『発でけんかになるだけでなく敵を作ります。』『Aくん、それをしてはダメ、そうじゃないでしょ』と『言う』と頑固になります。『こういふふうにはやらない方がうまくいくよ』という言い方に切り替えましょう。言葉の使い方一つで、子どもとの距離が縮まります。

発達障がいはどうして起きるのでしょう。結論は、発達障がいは親のしつけや育て方、その子の育った環境が原因ではありません。親の育て方で発達障がいは起きません。

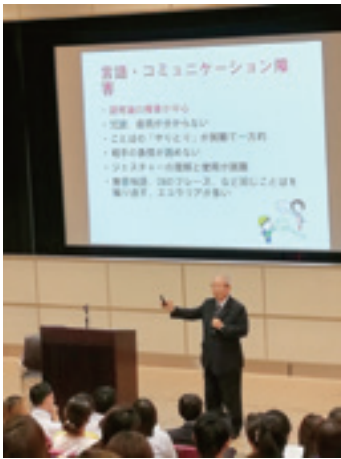
ところが日本では『母親が仕事ばかりしているから。子育てをおろそかにしているから。何やってんねん』という考え方が強いです。昔は児童精神科医も小児科医も『お母さん、どんな育て方したの?』と『言う』時代がありました。80年代の終わりまでは、また医学の世界でも母親加害者説でした。今は違います。発達障がいは全部、大脳機能が関係しています。

教室で『はい、皆さん。こちらを向いて』と『言う』と、全員こちらを向くのでしょ。でも、1年生の1学期は言わない方がいい。なぜな

ら、学校という場所を子どもたちがわかっていない、どうしていいかわからない、全員が発達障がいに見える時期です。学校という場所について学ぶうちに、2学期になると生徒らしくなる。すると「はい、皆さん。こちらを向いて」と言っていると、Aさんだけ向いていない。一人だけなので目立ちます。大きな声で呼ぶうちに、まわりが反応し始めます。こう

いう時、特別支援教育とは、指示に従えない子がなぜ従えないのか原因を探します。むやみに名前を連呼してはいけません。可能性を4つ考えます。①聞こえなかったのかも。それならその子を一番前の席にする必要があります。②聞いていなかったのかも。夢見の子、他のことを考えている子、一番多いパターンです。問題になるのは③④の場合です。③「はい、皆さん。こちらを向いて」「俺の名前、皆さんやないで。皆さんってだれ?」自閉系の子です。④下を向いている。全部聞こえている。やるべきことは百も承知。でも下を向かなくてはならない理由がある。この子にはなぜ向けないのかという視点が必要です。特別支援教育はそういうきめ細かさが要求される教育です。ちょっとした一言でつまづく子たちがいる。こちらから見れば理解できない行動です。

一人ひとりに、なぜできないのか、どこでつまづいているのか、しっかり把握していく教育が求められています。予定変更が苦手な子、勝ち負けにこだわる子、隣の子が叱られると一緒に泣く子、発達障がい背景にあることが多いです。この子たちは、実は困った子で



はなく、本人自身が困っている子です。わからないからやってしまう、うっかりやってしまう、何で叱られんねん。ここをわかってあげることが非常に大切です。どうしてもできない所に目を向けてしまいがちですが、そうではなくて、その子の得意なところをほめることからスタートしましょう。

発達障がいの子の場合、感覚に過敏性があります。最初のサインは聴覚です。聴覚には聴力と前庭感覚の2つがあります。聴力では、小さい時から何かちよつと音が聞こえると大袈裟に両耳をふさぐ・掃除機や洗濯機の音を嫌がる・トイレの水を流すのを嫌がる、いい面ではお父さんが帰って来ると誰よりも早く気づく、といった過敏性があります。

例えば、音楽室のタンバリンの音が嫌いとなると、音楽室に絶対入らないというこだわりになります。その結果、音楽の先生が大嫌いなことになる。本当はあの部屋が嫌、あの部屋の中のタンバリンが嫌、でも、本人が言わないからわからない。なぜ言わないかというと、生まれてからずっとそうだからです。ということは、私だけではなくみんなもそうだと思っている。だから言わない。私たちが病気になる時、ここがおかしいと訴えられるのは、いい時と比較できるからです。様々な特性を抱えている子は、生まれてからずっとそうなので、こちらが冷静に気づいてやらないと、わからないまま大人になります。だから、まわりの気づきがものすごく必要です。

次に、前庭感覚です。最初は偶然です。くるくる回ると、ものすごく強い、不快ではない快の刺激が、脳に突き上げて入ってきます。そうするとどうするかというと、不安な気持ちになると、それを打ち消すためにくるくる回るようになります。回ったら快の刺激が入ってくるから気持ち安定します。「くるくる回るな」とは、絶対に言わないでください。同じような動きがジャンプです。手をひらひらさせる時もあります。これを強くするタイプは、自閉症または自閉に近い子が多いです。

なぜするかというと、ものすごく強い快の刺激が入るからです。それをすることによって、他の不快感を打ち消しています。だから、やめさせたらダメです。

最後に、非常に大切なポイントです。気をつけてほしいのは、障がいと特性を区別することです。こだわりがあったら自閉症なのか。こだわりは、科学者はみんな持っているんです。こだわりが強い＝自閉と考えるようにするのは同時に、その特性は才能かもしれない、生きていく上で大事なものかもしれない、ギフトッド＝神から賜った贈り物かもしれない、と考えるべきです。特性とは、その子の個性であり、特徴であって、障がいではありません。そうすると、障がいがあるから出てくるかというと、障がいは、その子に関わる環境との相互作用で起こることです。障がいは、どのような配慮をするか＝合理的配慮で、障がいにはならないのです。

（講演会より要旨）

竹田契一先生プロフィール

米国アズベリー大学卒業、ピッツバーグ大学修士課程修了、ミシガン大学博士課程修了。慶応大学医学博士、大阪教育大学教授を経て、平成15年に定年退官。現在は大阪教育大学名誉教授、大阪医科大学LDセンター顧問など。専門は、発達障害への教育的支援、脳損傷時のスピーチリハビリテーション、神経心理学。著書多数。NHK「あさいち」など、メディア出演多数。



竹田 契一 先生

アンケート抜粋

具体的にとてもわかりやすかったです。否定的な言葉は使わないようにと思いましたが、日常生活で出てくる言葉は否定的だったと反省しました。できない事はかりを見ず、できる事に目を向けていくと思えました。

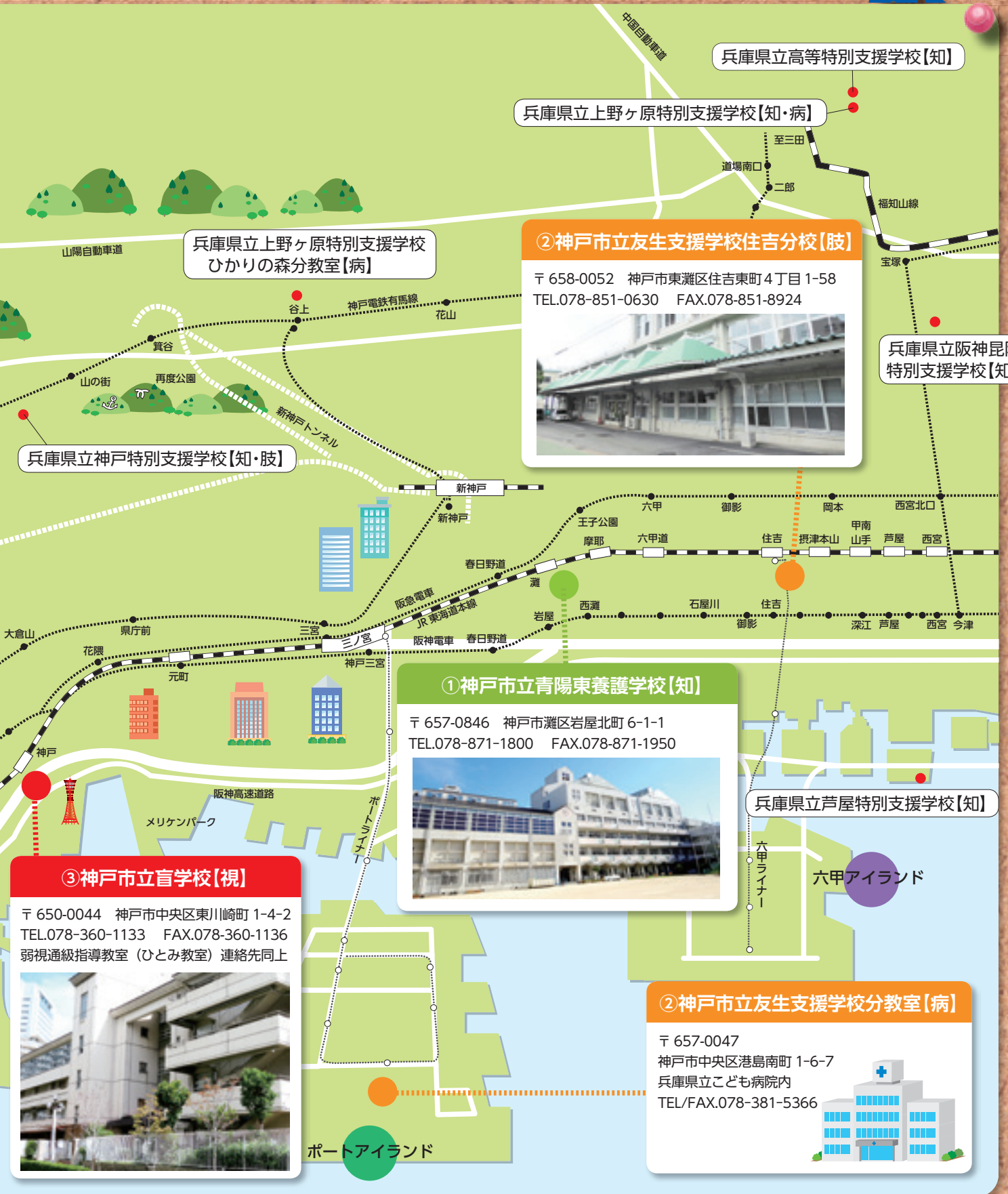
私が子どもの頃はこのような理解が深まっておらず、すべての子どもがひとくりにされてきたように思います。そんな中でも成長したことを思うと、「甘やかしているのでは」という気持ちも捨てきれませんでした。しかし、少し考え方が変わりました。私自身も勉強してさらに理解を深め、特性を持った大人への対応も変えていかなければと思えました。

「困った子ではなく、困っている子」という言葉に、発達障がいの子を持つ親として、はっとさせられました。いろいろと悩みも不安もあるけれど、発達障がいは環境や親のせいでは絶対にならないという言葉に救われました。

発達障がいの子どもを持つ親（特に母）は、まず自分のせいだと思っていると認めます。そこを全力で否定してくれた竹田先生の言葉に涙が出ました。子どもの言動に細やかに対応し、研究しているすべての先生方に感謝しました。今日聞いたことが全国に広まって、理解も広がることを心から願っています。

今日の内容は我が子のことかと思うくらいでした。私も他人からしつけがなっていないと言われ、ショックを受けたことがあります。先生のような人がもっとたくさんいたら、子どもたちも親たちも、もう少し楽に生きていけると思いました。

を紹介します。



兵庫県立高等特別支援学校【知】

兵庫県立上野ヶ原特別支援学校【知・病】

兵庫県立上野ヶ原特別支援学校
ひかりの森分教室【病】

②神戸市立友生支援学校住吉分校【肢】

〒658-0052 神戸市東灘区住吉東町4丁目1-58
TEL.078-851-0630 FAX.078-851-8924



兵庫県立阪神昆陽
特別支援学校【知】

兵庫県立神戸特別支援学校【知・肢】

①神戸市立青陽東養護学校【知】

〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町6-1-1
TEL.078-871-1800 FAX.078-871-1950



兵庫県立芦屋特別支援学校【知】

③神戸市立盲学校【視】

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町1-4-2
TEL.078-360-1133 FAX.078-360-1136
弱視通級指導教室（ひとみ教室）連絡先同上



②神戸市立友生支援学校分教室【病】

〒657-0047
神戸市中央区港島南町1-6-7
兵庫県立こども病院内
TEL/FAX.078-381-5366





私たちの学校

④ 神戸市立いぶき明生支援学校【知・肢】

〒 651-2243 神戸市西区井吹台西町 7-1
TEL.078-997-6311 FAX.078-997-6312



② 神戸市立友生支援学校【知・肢】

〒 652-0063 神戸市兵庫区夢野町1丁目1
TEL.078-576-6120 FAX.078-576-6061



⑤ 神戸市立青陽須磨支援学校【知・肢】

〒 654-0155 神戸市須磨区西落合 1-1-4
TEL.078-793-1006 FAX.078-793-1007



兵庫県立のじぎく特別支援学校【肢・知】

兵庫県立西神戸高等特別支援学校【知・肢】

④ 神戸市立いぶき明生支援学校 (施設肢体不自由児訪問学級・小・中・高)【肢】

〒 651-1106 神戸市北区しあわせの村 1-9
(ここにこハウス医療福祉センター内) TEL.078-743-2733

神大附属特別支援学校【知】

兵庫県立のじぎく特別支援学校
おおぞら分教室【肢】

兵庫県立神戸聴覚特別支援学校【聴】

兵庫県立視覚特別支援学校【視】

- この他幼稚園・小・中学校に次のような学級、教室が設けられています。

特別支援学級 (知的障がい、自閉症・情緒障がい、肢体不自由)、難聴学級、病弱学級、きこえとことば教室 (言語障がい・難聴)、そだちとこころの教室 (自閉症通級指導教室)

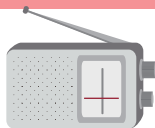
- 神戸市立特別支援学校に関するお問い合わせは、各校の教頭および教育相談担当者、または、特別支援教育課へ。
(神戸市教育委員会 特別支援教育課 TEL.078-322-5788 FAX.078-322-6159)
- 福祉に関する情報のお問合せは、各区役所保健福祉部へ。

害時への備えと必要な支援や対応について

視覚障がい

備え

- 白杖やラジオ・携帯電話などは常に身近な場所に置き、非常用の持ち出し袋を用意しておく。
- 避難時のケガを防ぐために手袋や厚底の靴を用意しておく。
- 災害時はブロックや木が倒れ、通れなくなることもあるので避難経路を複数考えておく。
- 学校や施設、職場などで災害が起きた場合、誰と、どうやって避難するかシミュレーションしておく。



対応・支援

- 周りの状況が分からず、不安そうな時は肩か腕を軽くたたいて声を掛けてください。
- 不慣れな場所では、一人で移動することは困難です。周囲の環境やトイレの場所など掲示物では判断できないので移動の際には誘導を行ってください。
- 誘導する時は、腕や肩につかまってもらい、段差など周囲の状況を説明しながら誘導する人が半歩ほど前を歩いてください。
- 本人が自分で置いたものを、やむを得ず移動させる時は、本人に触ってもらい、場所を確認してもらってください。

知的障がい・発達障がい

備え

- できる範囲で周りの人に障がいのあることを知っておいてもらう。
- ヘルプカード等を利用して、連絡先、いつも飲んでいる薬、困った時に周りの人に助けてほしいことを書いて身につけておく。
- いつも使っていて、あると落ち着けるものを避難先へ持ち出せるように準備しておく（本、おもちゃ、携帯音楽プレイヤー、ゲーム機など）。
- 家族や支援してくれる人たちと話し合っって災害が起きた時にどうするか決めておく。
- 学校や職場、施設で災害が起こった時の決まりごとを覚えてもらう。



対応・支援

- 話し掛ける時は、落ち着いた穏やかな口調で話してください。
- 簡潔に具体的に話してください。
「どうしましたか？」 ×
「お母さんはどこですか？」 ○
- 言葉で通じない場合は絵や写真を見せたり、ジェスチャーを用いたりしてください。ひらがなで書いたものを見せると分かる人もいます。
- 大勢の人がいる場所は、周囲が想像する以上に苦痛で避難所にいられないことがあります。部屋の角やテントの使用など個別空間が必要になります。
- 行っては行けない場所、危険な場所には × をつけてください。



日頃から地域の避難訓練に家族と一緒に参加し、災害時の避難経路を確認することも大切ですが、市町村の「**避難行動要支援者名簿**」に名前を登録しておくことが重要です。

身体障がい(肢体不自由)

備 え

- 車椅子や歩行補助具は、被害を受けにくい場所に置き、暗闇でも分かるように発光シールなどを貼っておく。
- 車椅子の空気圧、バッテリーの充電(予備も含む)は、常にチェックしておく。避難経路は複数考えシミュレーションしておく。
- バリアフリーなどの問題で避難所が使えない場合はあらかじめ自治体に連絡して相談しておく。
- ヘルパーなどを使う場合は災害時の支援をどうするか相談し決めておく。
- 紙おむつ、携帯トイレなど自分に合った排泄処理用具の準備
- 障害者手帳やお薬手帳の準備



対応・支援

- 車椅子を使っている人には「車椅子を押します」など必ず一声掛けてください。
- 避難所では段差のない場所、なるべく出入り口に近い場所を確保できるよう配慮してください。
- 避難所のトイレを使用できない場合は本人の希望を聞いて必要な支援を行ってください。
- 言葉を発することが困難な人もいますので、一語一語ゆっくり確認してください。
- 体温調節が困難な方もいます。優先的に毛布を配布するなど配慮を行ってください。



避難所での医療的ケアが必要な方への備え

電源確保のための
発電機



足踏み式吸引器



移動介助補助具
『ちょい楽ばんど』

こんなもの
あります



避難スペース: 医療行為、排泄などの為のプライベート空間



おむつ替え台

神戸市立青陽東養護学校【知】

疑似体験

①どんな風に見えるの？



ペットボトルの穴ほどの視野で指示されたものを探す。

②どうしてうまくできないの？



分厚い軍手をして10mm大のシールを貼る。

③どんなふうに聞こえているの？



マスクで口元を隠している人からの指示を聞き取る。

④言葉がわからないってどんなこと？



「ピカ、ピカー？」と理解出来ない言葉で話し掛けられる。

せいようフェスの様子

プーさんはんこを
押してね



スタンプラリーは学生さんの協力で

青陽東には様々なPTA活動があります。PTA本部の他に、広報紙を作成する「広報部」、清掃や給食試食会などを主催する「文化保健部」、なつまつりやクリスマス会を主催する「ふれあい部」、「進路部」は卒業後の行き先となる事業所の見学を計画したりと養護学校らしさがありますが、中でも特色といえるのが「ボランティア推進委員会」でしょう。

今から10年前、障がいのある子供たちのことを少しでも知ってもらいたいと、ある保護者ほかの団体で行われていた疑似体験を取り入れ、当時のPTA本部が校区の小学校の総合学習の時間に行わせてもらうなどして広めていったのが始まりでした。

その後、実行委員会という名前では、委員がボランティアをするところという誤解を招くと「推進委員会」と名称を変え、疑似体験と学内行事へのお手伝いを一大柱として、試行錯誤しながら続けて今に至ります。

委員会では、毎年、年2回、本校の保護者と校区の小学校あてに案内を出し、疑似体験を行っています。本校で行う疑似体験は、主に自閉症の子供たちを想定したものです。体験には、ペットボトルメガネを使って、ポイントで興味のあるものをとらえる子どもたちの見え方を体験する「どんなふうに見えるの」、手袋をはめてシールを貼ることのできる子どもの急かされるつらさを体験する「どうしてうまくできないの」、何人かが口元を隠して一斉に話すことで、いろいろな音があふれる中で、自分に必要な音を聞き分けることが苦手な子どもたちの聞こえにくさを体験する「どんなふう聞こえているの」、言葉のわからない世界を体験する「言葉がわからないってどんなこと」などがあります。

毎年、同じように見えて、微妙に表現が違っていたり、違う体験を取り入れてみたりと、その時々委員会メンバーが考えながら行ってくれています。

体験終了後のグループトークでは、参加者の方々から感想や意見を伺い、私たちの方が教えられることもあります。

学内行事へのお手伝いですが、ボランティア活動に協力してくださる高校・大学に案内を出して学生さんに来ていただき、ふれあい部が主催するなつまつりやクリスマス会、学校主催のせいようフェスティバルで、販売やゲームのお手伝いを通して子どもたちと触れ合ってもらったり、盛り上げ役として一緒に楽しんでもらったりしています。「昨年楽しかったから今年も来ました」と言ってもらえると、とても嬉しい気持ちになります。

青陽東は2年後に、小中学部はHATにできる新設校に、友生支援の中央区以東の肢体不自由部門と共に移ります。そして今の場所に東部高等特別支援(仮称)として生まれ変わります。これからも、子どもたちのことを知ってくれる人、理解してくれる人、温かく見守ってくれる人が増えてほしいと願っています。

神戸市立盲学校〔視〕

盲導犬体験会

夏休み登校日の7月24日、本校で『盲導犬体験会』が開かれました。

基本的にトレーナーやユーザー以外が盲導犬に触れることはできないのですが、今回は視覚障がい生徒たちのため、特別にふれあう機会を作っていました。

盲導犬の見聞はあっても、ほとんどの生徒が盲導犬に触れた経験がなく「何を食べるとの?」「どんな手触り?」と興味津々です。決して鳴かず、触れている間もおとなしくじっとしている盲導犬の様子に、最初は想像以上の体格の大きさに驚いていた生徒たちもすぐに安心し、笑顔になりました。

一緒に歩く体験では、年齢や身長、歩く速さが違って、盲導犬は一人一人の状況に合わせてゴールまで安全に導いてくれました。リードを通じてしっかりとお互いの信頼が繋がっていたことを実感できたと思います。

他にも、盲導犬が誕生するまでの大変さや、実際に盲導犬と生活されている方からお話を聞き、盲導犬と共に自由に風を受け



盲導犬についてのお問い合わせ
社会福祉法人 兵庫盲導犬協会
<http://www.moudouken.org/>

て歩く喜びや、お店に入店を断られた経験談もお聞きしました。

今回の体験会で、外出時の介助方法に白杖やガイドヘルパー以外にも、盲導犬という選択肢を増やした生徒もいるのではないのでしょうか。盲導犬、オアシスと、ベリーのふれあいが、生徒たちの心に将来への希望の芽を蒔いてくれたことと思います。

盲導犬の仕事はユーザーを安全に誘導することです。突然声をかけられたり、触られると、集中力が削がれて安全性が保てなくなり、どうか街や電車内で見かけても犬に声をかけずに、静かにあたたかく見守ってください。

また、盲導犬はユーザーの指示で進みます。もし周囲で危険だと感じた時は、せび声を出してユーザーに教えてください。

現在、兵庫県に登録されている盲導犬は43頭。みなさんが街で見かけた盲導犬はそのうちの1頭かもしれません。

みんなが彼らの任務の正しい意義を知り、一人一人の安全を社会全体で見守っていく未来を強く願っています。

神戸市立友生支援学校〔知・肢〕

地域とのつながり

本校が夢野に設立され六年を迎えました。本校は、地域の防災訓練への参加や防災頭巾の製作、地域企業様開催の餅つき大会等への参加を通じて地域とのつながりを密にしています。また、近隣スーパーや商店街での買い物体験、野菜や花、革細工製品の販売、中学部のトライやるウィーク等でも地域の方にお世話になっていきます。さらに高等部の喫茶「caféリラつくす」の営業は、お客様として来て頂いている地域の方々との交流が出来る良い機会にもなっています。常に目標を持って行う事で大きな成長があります。子ども達の活躍を見守りながら、地域とのつながりを諸先生方や保護者全員で大切にしていきたいと思っています。

様々なつながりの中で、日々、子ども達は成長していきます。一つ一つのつながりが、かけがえのない大切なものとなり、それが子ども達にとつてのより良い生活環境づくりにつながって欲しいと思います。

caféリラつくす



福祉機器展



してだけではなく、地域に開放される事でその先に、障がいのある子ども達や家族の理解につながっていく事を願っています。

保護者同士のつながり

障がい児の兄弟「きょうだい児」について研修会を開催しました。きょうだい児が抱える悩みや葛藤について学び、立場は違えど保護者としての在り方について活発な意見交流が行われました。

福祉機器展

多数の企業様のご協力により、本校内で初めて開催されました。車椅子やバギーに乗ったままでも子ども達は周囲に気兼ねなくリラックスした状態で福祉機器に触れる事ができました。近場で開催されるメリットを感じる事ができ、またおむつフィッターの方に排泄の相談もする事ができるなど、保護者にとって貴重な機会になりました。コミュニケーション機器では、子どもが実際に触れる事の大切さを感じる事ができました。今後も継続しての開催を望む声がたくさんあり、機器の情報などを得たりする場所としていただけは

神戸市立青陽須磨支援学校【知・肢】

青陽須磨支援学校 開校10周年

本校は、青陽高等養護学校の伝統を引き継ぎながら平成21年4月に小・中・高等部からなる知的障がい教育の特別支援学校として開校しました。その後24年4月からは肢体不自由部門を併置し、様々な障がいに対応できる特別支援学校として教育活動を展開してきました。

そして今年度、青陽須磨支援学校となり、10周年を迎えることとなりました。

学校祭に向けて、生徒会が中心となり『10年の軌跡 そして未来へ』というテーマを掲げ、学校祭の準備や練習に取り組んできました。このテーマには、学校生活を通じて輝ける未来へ力強く進んでいこうとする子どもたちの強い意志が表現されています。

11月17日に開催された学校祭第一部では高等部の生徒が10周年記念式典で「校歌ダンス」を披露し、記念式典を大いに盛り上げてくれました。記念制作として、本校に在籍する児童・生徒全員に、全3600ピースを配布し、校歌をイメージしたモザイク壁画を制作、完成させました。このモザイク壁画では、青陽須磨支援学校で育った子どもたちが、虹に浮かんでいる帆船のように、明るい未来に向かって出港し、更なる活躍をしてくれるように願いを込めています。

作品づくりを通して「一人では難しいことも、みんなで力を合わせればこんなに大きく素晴らしい作品を制作することができる」ということも体感することができました。

児童・生徒・教職員が一丸となり、ステージや記念制作に取り組み、大変素晴らしい心に残る10周年を迎えることができました。

10周年を記念して誕生した「せいようくん」



高等部 校歌ダンス



①下絵塗り



②ピース貼り



③モザイク壁画完成!!



神戸市立いぶき明生支援学校【知・肢】

いぶき明生支援学校は、

知肢併置校として

2年目を迎えました。

今年度の生徒会のスローガンは「ALL-IBUKI いぶきの輪をひろげよう」です。知・肢それぞれの部門がお互いを認め合い、尊重し、高めあい、心を一つにした学校づくりを目指してステップアップしていきたいと考えております。

春には、知・肢それぞれの部門ごとに宿泊体験学習、体育会が開催されました。仲間意識がグッと強まりました。2学期にはメイン行事の「いぶき祭」が、知・肢合同で開催されました。非常に多くの方が来校し、とてもにぎわっていました。知・肢それぞれの特色のあるステージはとても活気があり、ステージ上の笑顔、それを観劇する人の笑顔で、会場の心が一つに包まれた素敵な時間でした。部門の枠を超えて鑑賞できたこともとても新鮮で、「ALL-IBUKI いぶきの輪をひろげよう」のもと大いに盛り上がりました。

PTA活動においては、本部と専門部があるります。本部では引き続き、コミュニケーションをとりながら、知・肢が協力して行えるような環境を作ること意識して行



てきました。連絡方法、活動内容、手順なども少しずつ整理しています。

専門部は広報部・文化厚生部・研修部・ふれあい部の4つが活動しています。

広報部では年に2回、広報誌「いぶきの風だより」を発行し、各学部や、PTA活動の紹介を掲載して、より学校を身近に感じられるよう工夫しました。

文化厚生部ではフラダンスやアロマ教室を企画し、保護者同士、リフレッシュしながら交流を深めました。

研修部では市の施策や、障害者年金制度について各分野の詳しい方を招いて知識を深めたり、事業所見学会を企画したりし、卒業後に活かせるような情報を共有しました。

ふれあい部では親子一緒に楽しめることを企画しました。今年度、知的部門は、トランポリン、サイバーホールなどを使った楽しい運動をしました。肢体部門は、人気のキー作りを開催しました。

情報は共有したり、ともに悩み考えたりすることは部門を越えての交流やそれぞれの特徴や特性を知る良い機会になりました。これから子どもたちの大好きな学校、そして卒業後の生活もより充実したものになるよう、子どもたち、先生方、保護者、地域の皆さんとともに頑張っていきたいと思っています。「いぶきの輪」が大きく、大きく広がりますよう、これからもどうぞよろしくお願ひします。



特別支援教育の

さらなる充実に向けて



神戸市教育委員会事務局
学校教育部特別支援教育課
課長 三宅 聡

神戸市では、平成26年度から30年度までを計画期間とする第2期「神戸市教育振興基本計画」の中で、「特別支援教育の充実」を重点事業の1つとして定め、施策を推進してまいりました。

この間、特別支援学校に関しては、学校で勤務するパート看護師を増員したほか、平成29年度にいびき明生支援学校を開校し、また、平成33年（2021年）開校を目指して、HAT神戸地域への特別支援学校の建設及び青陽東養護学校の高等特別支援学校への移行について決定

しました。

小・中学校に関しては、医療的ケアを必要とする児童生徒のために訪問看護ステーションから看護師を派遣する事業を開始したほか、幼稚園等からの円滑な進学をサポートするためにインクルーシブ教育推進相談員を配置しました。

また、高等学校に関しても、国における制度改正にあわせて、高等学校における通級による指導について、平成30年度より実施に向けた教育相談を開始し、31年度より本格実施することとしております。

このように、子どもたちが成長段階において切れ目のない支援を受けられるようにするために、PTAの皆様をはじめとする特別支援教育に関わる多くの方々

を実施してまいりましたが、共生社会の実現に向けたインクルーシブ教育システムを構築するためには、まだまだ課題が残されているものと認識しております。市では、平成31年度から35年度までを計画期間とする第3期「神戸市教育振興基本計画」の策定に向けて作業を進めているところですが、特別支援教育のさらなる充実に向けて、取り組みをより強化してまいりたいと考えております。

子どもたちのよりよい教育環境を整え、一人一人が十分に自分の力を発揮できるような支援を実施できるよう、みなさまと手を携えて進んでまいりたいと考えておりますので、引き続き、ご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

多くの人々の連携の下に



神戸市総合療育センター
診療所長 高田 哲

神戸大学を退職し、今年から神戸市総合療育センターに勤めています。総合療育センターには、診療所以外にまるやま学園（未就学児対象）、あけぼの学園（15～18歳児対象）が設置されています。まるやま学園では、知的・発達障がいのある子ども、肢体不自由の子ども、難聴の子どもが、各々「まるやまクラス」、「あじさいクラス」、「ひばりクラス」に分かれて通っています。クラスは違っても一つの園になったことで、お互いの交流がずいぶん増えました。今年は、「まるやまクラス」と「あじさいクラス」が

初めて合同で運動会を開き、とても賑やかで楽しい会となりました。

遺伝子解析などの医療面での進歩により、稀な疾患の診断が可能となってきました。fMRI、PET等の機能画像検査によって、発達障がいに関する病理理解も進歩しました。遺伝子診断の普及によって、同じ疾患・病態であっても子どもごとに症状が異なることがわかってきました。一方、異なった病態であっても経管栄養、吸引、在宅酸素、そして在宅人工呼吸器など同じケアが必要な例が増えてきました。同じ疾患名、同じ在宅医療を受けている子どもでも、個別の判断が必要となります。元来、医療は一人ひとりを対象とした個別性の強い行為で、ともすれば「治療」に傾きがちです。学校教育は、集団としての特性を活かしな

がら、子どもたちの発達を促す行為なので、集団の中での同一性、公平性を重視し、個別的な判断は苦手です。

障がいのある子どもたちの発達を促すには医療と教育の協力が不可欠で、「療育」と呼ばれています。特別支援教育はその延長線上にあり、子どもを持つ長所を最大限に伸ばすことを目標としています。医療と教育だけでなく、就労を含めて保健や福祉の専門家の幅広い連携が必要です。連携のコアとなるのは、ご家族です。子どもの発達状況や重症度だけではなく、ご家族の持つ価値観が療育の方向性を決めます。これからの特別支援教育は、子どもがもつ多様性にどう対応するかが重要です。

みんなが幸せな社会に

神戸市立特別支援学校 PTA 連合会会長
神戸市立青陽東養護学校 PTA 会長
野村 誠一



平素より、本会の活動にご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。

10月2日に「共に生きる社会を願って」をテーマに校種別研修会を開催致しました。直前の台風による影響で、開催も危

ぶまりましたが、5校種のPTAの方々、並びに関係者の方々に多数ご参加いただき、無事に終えることができました。本当にありがとうございました。

講師には竹田契一先生をお招きし「発達に課題を抱える子どもと理解と教育的支援について」と題して講演いただきました。発達に課題を抱える子どもはどこでつまずくのか？どう支援すればいいのか？どう関わればいいのか？ユーモアを交えながら具体的に、そして分かりやすくお話ししていただきました。先生や親の指示が伝わりにくく「困った子」と思われている子が、実はそうではなく「困っている子」というメッセージは、参加された方々に強く印象に残ったのではないかと思います。子どもに合った学びを探することは、発達障がいの子とも達だけでなく、通常学級に在籍している子ども達に

とつても一番必要なことではないか、と今回のお話の中で言われていたのを聞き、特別支援教育は教育の原点であり、これからの子ども達の理解には、特別支援教育の視点が重要だと強く感じました。本当に素晴らしい講演でした。

障がいの有無に関わらず、社会で自立して生きていく為には守るべきルールがあり、自分をコントロールする力を身につけなければなりません。

卒業した後の人生の方が長いのはみんな一緒です。だからこそ、特別支援学校の子ども達も、卒業後、社会で堂々と生きていけるようにと毎日頑張っています。悔いのない人生を送るために、ハンディを乗り越えて、自立しようと努力しています。自立できる障がいが一人でも二人でも増えれば、きっとみんなが元気になる。その先には全ての人々が互い

に認め合い、だれもが幸せを感じられる社会になつて欲しいと思います。

障がいへの理解が広がり、共に生きる社会が実現することを心から願っております。

常に備えよ

神戸市立特別支援学校校長会会長
神戸市立盲学校 校長
大野 毅



「大災は忘れた頃にやってくる」(科学者で随筆家の寺田寅彦)と言われているが、昨年の夏は忘れる間もなく、立て続けに自然災害に見舞われた。6月の大阪北部地震、7月の西日本豪雨、9月の台風21号と北海道地震等、いず

れも被害は甚大だった。(この原稿執筆の9月末現在)亡くなられた方々とご家族に謹んで哀悼の意を表します。

火災や地震、不審者に備えて、本校では年間三回の避難訓練を実施している。5月の第一回目の避難訓練の時、「今年度は阪神大水害から80年目になる。様々な災害に備えるように」との話をしたが、それが現実のものとなった。避難訓練では校内緊急放送があったから、幼児児童生徒達が教師の指示に従い、ライフジャケットを装着して、教師の手引きなどでグラウンドや総合教育センターに避難する訓練を行っている。しかし、現実には南海トラフ大地震等の大規模地震や津波が押し寄せてきた時には、様々な状況が想像される。大騒音の中で視覚障害のある児童生徒達が聴覚や触覚を頼りに判断し行動できるの

か。車いすや瓦礫の中を避難できるのか。周りの人々に支援を要請できるのか。保護者に無事に引き渡しができるのか。スクールバスが渋滞で身動きできなくなつたら……と。

9月の台風21号の時のように予想を上回ることも起こる。高潮の予報で盲学校の南側の防潮堤が作動し、海水の浸水には備えることができたが、予想していないことに、北の大倉山側からの雨水が側溝からあふれ、盲学校の西側道路は洪水になった。南側からの海水と北側からの洪水で挟まれた形になり、盲学校への浸水を心配した。その後、小雨になり、浸水までに至らずに安堵したが、1969年の第二室戸台風の記録を破る高潮だった。

阪神大水害、阪神大震災での教訓から東灘区にある甲南大学には、創立者

の平生飢三郎氏の言葉「常二備へヨ」が石碑に刻まれている。毎日の指導の中で幼児児童生徒に命の大切さを伝えるとともに、保護者や地域、関係機関と連携しながら、安全を第一に、危機管理の備えを十分にしていきたい。

～編集後記～

会報「第41号」をお届けします。

今年度は近年多発している大規模災害への備えや必要な支援について特支P連の5校で特集記事を書かせていただきました。災害はいつ起こっても備えさえあれば、減災することができます。

「共に生きる社会……」

災害時には特に皆さまのご支援やご理解が必要とされます。どうか温かい心でご対応いただきますようお願い致します。

発行に際し、ご協力、ご尽力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

広報担当：神戸市立青陽須磨支援学校 PTA